



【書評】安部利一著『夜をあゆむ』22世紀アートの刊
A5判 五〇ページ

酒井 董美
ただよし

著者は臨床心理士の肩書きを持つ。昭和14年(1939)に島根県仁多郡奥出雲町横田で生まれた。島根大学卒業後、島根県内の児童相談所に勤務。平成11年退職後、島根県教育委員会嘱託スクールカウンセラーとして活動中である。

サブタイトルに「聞いて、悩んで、児童に寄りそった60年」とあるように、本書の内容はまさにその通りである。前著『あつ、そうか! 気づきの子育てQ&A総合版』(文芸社)では、六十五項目を二八五ページにわたって書き綴り、そこには具体的な処方箋が示されているが、本書は五〇ページであるので、詳細に叙述するのにはやや難点があるのはいなめない。

本書は著者の臨床心理士としてのこれまでの歩みを概括したものとええよう。内容は「まえがき」と「おわりに」を別として、次の四部から構成されている。

第一部・児童に出会うまで、第二部・児童相談所勤務時代、第三部・スクールカウンセラーの日々、第四部・地域などでの関わりから。

「まえがき」の一部を紹介しておこう。

本人の努力でどうにかできることだったら、いくらでも努力すればいいと思います、しかし、本人がいくら努力してもどうにもならないことが世の中にはたくさんあります。

その代表的な例が家庭環境です。親が子どもをいびり、暴力をふるう。それは子どもの側からの努力だけではどうにもなりません。子どもの側からのいじめも同じです。

私はそういう理不尽な不幸に対して、心の底から反発を覚え、自分の力で何とかしたいと思うようになりました。

そして最後に「本書を読んだ人の中から、明日の子どもたちを支える人が出てくれたら、著者としてこれほどうれしいことはありません」と結んでいる。

本書はコンパクトながらも著者の歩みの中から、経験した貴重な事例を取り上げ、子どもたちにとって何が大切であり、大人はどのように対処して行くべきかを示してくれている。長年教師として子どもたちと接してきた筆者にとっても、著者の生き方に同感するところ大なるものがあると納得したところである。

(元島根大学法文学部教授)